

『社会調査史のリテラシー』
—方法を読む社会学的想像力—

●佐藤健二 著

(新曜社, 2011年, A5判, 604頁, 6,195円)



●川端 亮

(大阪大学大学院人間科学研究科教授)

本書『社会調査史のリテラシー』は、タイトルからだけでは内容がよくわからない。多くの人は、よくわからないままにとりあえず、社会調査史の本と推測するだろう。社会調査の歴史について、調査年を追って順に並べられて解説がされており、そしてそこには、調査技法の発達史であるとか、アンケート調査の盛衰や質的調査の歴史について記述されているのではないかと。しかし目次をみただけで、本書はおよそそのような本ではないことがわかる。

600ページあまりの大著は、1章「日本近代における都市社会学の形成」で始まり、20章「都市を解説する力の構築」で終わる。都市社会学の本かと思いきや、5章「ライフヒストリー研究の位相」、8章「内容分析とメディア形式の分析」など、いかにも具体的な調査方法について述べたのではと思われる章がある。しかし、調査法の本ならば通例、最初か最後にくるような「量的方法と質的方法が対立する地平」「調査のなかの権力を考える」などの調査論にみえる章が6章、10章とまん中に据えられている。

本書は、著者の1990年代からのおよそ15年間の、社会調査の「方法」に関する論文を集めたもので、日本の社会調査に関する著作を取り上げた「歴史社会的な分析」である。R.ドーア『都市の日本人』(9章)、安田三郎『社会調査ハンドブック』(16章)などの有名な著作のほか、『東京市社会局調査の研究』(3章)や『日本国勢調査記念録』(12章)などのあまり目にしない書物が、表紙や中に掲載された珍しい写真、図表なども示すハイパーな構成で取り上げられる。古い雑誌を紐解いて、ジェンダーを語る歴史社会学しかみたことのない浅学な評者にとっては、素材を社会調査の著作に採る歴史社会的分析は、きわめて刺激的でおもしろかった。

たとえば質的調査と量的調査の二項対立は、1933年の戸田貞三『社会調査』においてはみられず、鈴木栄太郎、内藤莞爾、喜多野清一などの社会調査論を経て、1958年の福武直『社会調査』によって、その形式が完成する。とくに量的調査の対立カテゴリーとして、さまざまな手法を1つの質的方法というカテゴリーとしたのは、敗戦の影響によるものであることがおもしろい。すなわち社会の実証的計量分析でもって、日本復興の基礎資料を提供することが当時の時代要請であったことや、半封建的な社会構造を民主主義に革命するためには、日本社会の全体的構造的関連を量的調査で明らかにすることが必要だったことなどが、質的調査という大きな残余カテゴリーの構築に影響しているのである。

本書は、歴史社会学のおもしろさとともに、調査を支えるリテラシーとして、リストを作ること(3章)や聞くことばの力(7章)、質問紙の現実を歪めてしまう力(12章)なども論じられる。さらに1冊の本全体で、社会調査史を読み解いて、社会調査論としたおもしろさがある。佐藤は、「社会調査とは認識を生産するプロセスである」(489頁)という。社会調査とは、質問紙や観察などの方法でデータを収集し、あるいは二次データにより社会をデータ化する。そしてデータによって、社会認識を作り出すものなのである。この定義は、安田三郎流の、「社会調査は直接観察し、記述・分析するもの」という多くの人が目にしたことがある社会調査の定義からは、かけ離れている。そして、それは社会学とは何かという問いの答えに限りなく近い。理論と実証という対立もニセとし、社会調査の力を最大限に評価している調査論なのである。